

のが会則でした。批判もアドバイスもせず、ただ自分は語り、相手は聞き、相手が語り、自分が聞く。という、今思えば一種のカウンセリングだったと。

東山公園の猿の話をお願いしました。

小川 当時、東山公園に猿と他の動物がいて、時々図書館で1人になるのにも疲れると、東山公園に行つて猿を見ていました。語れば語るほど暗いですけど(笑)。やっぱりあつた街中の公園に意味もなく猿がいるつていうのはいいことだなと思います。

人物を考えるときにモデルはいませんか。

小川 実際のモデルを書いたことはほとんどないと思います。大抵自分で作り上げた登場人物で、たとえば「私」になつていても、書いている人と自分は全然違います。書いている本人である自分が、その小説の渦中に飛び込んでしまうと視野が狭くなつて、大事なものが見えてこないの、小説の世界から少し距離を置いて、登場人物たちの動いているのを観察するという立場に立たないと見逃してしまうものが出来てくると思います。

小川さんが本を読んで感動するのはどういう時ですか。

小川 私も本を読んで泣くというか、涙ぐむことは割とよくありますが、どうして泣くかという、悲しいから泣くかというのとはちよつと違って、本を読んだときに泣くというのは、えもいわれぬ言葉にできない思いが、形としては涙になつて出るという感じですね。ただ読んで主人公がかわいそうになつて泣くだけの

小説も勿論あるんですけど、やはり文学の本当の役割というものはそうではなくて、悲しいとも言えない、うれしいとも言えない、苦しいと切ないとも何とも言葉にできない感情を、言葉で書くのが小説だと思つた。本当に良質な小説を読んだときに流す涙というのは、ちよつと他の体験ではできないのではないかなと思つた。

『ラストは「これだな」と思いました』

小説を書くときに、結末は考えて書きますか。

小川 結末は決まっていなくてもいいです。結末までわからないけれど、1行目が書けるといふ感情が得られて、書き始めるんですけれど、書いていくうちに次の場面が見えてくる、書いていくうちに登場人物が動いてくるのを追いかけるようにして書いていきます。結末はたいてい自分が予想しなかったものになります。博士の場合は、博士が近いうちに死ぬことはわかつていたけれど、あの完全数の背番号、江夏のカードを描写して終わるとはぎりぎりまでわかりませんでした。博士のお見舞いに行つて、その時廊下の向こう側から来る博士の首にルートが送つたカードがぶら下がっている、というのを書いたときに、ラストはこれだなと思つた。それで最後は完全数28つという数学的な、きつぱりした感情のない最後になりました。それは自分でも不思議でした。博士とルートと家政婦がすごく至福な時間を過ごしたという情緒的な話なのに、最後はものすごく感情を排した論理的な文章で終わるつていうのが、それは自分でも発見でした。

夢へチャレンジ!

田中恵美さん
(平成12年卒)

平成18年、倉敷市在住の美術作家の高橋秀、コラーージュ作家の藤田桜夫妻が、留学生を送り出す「秀桜基金」を設立しました。

第一回同基金留学賞には、全国より63人の芸術に関わる若者が応募、平成12年卒の田中恵美さんから3人が受賞しました。

田中さんは現在25歳。本校卒業後、武蔵野美術大学に進学、版画の世界に興味を持ち、同大学院へ進学しました。

大学時代には「全国大学版画展収蔵賞」、大学院時代には「第73回版画展版画協会賞」、「第3回山形版画大賞展大賞」など様々な賞を受賞。卒業後も個展や版画展への出展を続け、受賞後の留学前最後の個展を岡山市内で開催しました。

田中さんに母校の思い出や意気込みなどについて聞きました。

● 母校での思い出は？
子どもの頃からイラストや漫画をよく描いていました。高校では友人の影響で吹奏楽部に所属していましたが、引退した後

「この『自由な時間』を自分のためにどう使おうか」と考え本格的に絵の勉強を始めたんです。

自分にとって学校の思い出

は、吹奏楽部のクラブハウス近くにある森などの風景です。私たちは『秘密の花園』と呼んでいたんですが、六高記念館の前の橋を渡った先の森は、まるで校舎のある側とは異空間に行くような、空気が違うような気がして大好きで、冒険気分がよく行っていました。

校内の自然や、それぞれの場所が持つ空気や空間を楽しんで過ごした3年間で、自分が感じた空気間に関心を強く持っていたことは、今の作品のスタイルへも強く繋がっている気がします。

私の作品は木々の木漏れ日や水面の様子、また落ちる花弁や宙に舞う塵など、誰もが見たことのある情景をテーマにしています。自分の記憶やイメージを作品を見てくださる人と共有することが重要で、私の作品を見ても忘れていたことや懐かしさが一番の喜びです。そういった意味で私の作品は、彫刻刀で版を彫ることで、記憶の糸をたぐりよせながら、その一瞬一瞬を表現することだと思つています。岡山で過ごした時代はその記憶の糸玉の大切な1つなんです。

● 留学にあたっての意気込みは？
まずは外から自分を見つめ直して作品の幅や視野を少しでも広げられたらと思います。スコットランドに決めたのは、小さな

な国なのに、文化がとても充実していると感じたからです。古い建築物や芸術を凄く大切にしている国で、総合芸術の力を持った芸術家を沢山生んだ国に実際に行って、その文化を肌で感じ、吸収したいと思つています。

● 故郷での初個展の感想は？
留学前に、故郷で個展を開くことができたことは本当にうれしかったし、ありがたいことだと思つきました。友人やOBの方も沢山来てくださつて、故郷の良さを改めて感じる事ができました。それと荷物を含め、一度岡山で自分をゼロにして行きたかつたんです。

● 同窓生の皆さんに一言!
これから自分がどんな風に変わっていくかわかりませんが、美しいものを常に作りたい、形にしたいという情熱をきちんと持ち続けてこれからも全力でがんばつてきたいと思つています。

